



## 保育現場からの現代幼児論(4)



# イノセンスの表明

友定 啓子

### イノセンスの表明

前回の終わりに、現代社会は子どもが発達するには困難な環境にあること、幼児の攻撃性はそれに対するイノセンスの表明であるという指摘をした。「イノセンス」とは、一般的には無垢とか無邪気というような意味であるが、芹沢俊介氏の子ども論<sup>1)</sup>の基底的概念

で、「被贈与性」ということを意味する。すなわち、「子どもという存在は親から『そのままでは引き受けられない現実』を強制的に贈与されたもの」だという捉え方である。この与えられた属性について本人には責任がないという意味でも「イノセンス」ということばが使われている。誕生自体が、親からの強制的な書き込み、すなわち暴力であるというのだ。子どもは、

この暴力に対抗する存在としてまずあり、この与えられた様々の属性（このからだ、この性、この自分）を引き受けていく過程が、成熟すなわち大人になっていくことだというのである。それは、親に対するイノセンスの表明（対抗暴力）を通じて行われ、それが大人に受け入れられることによって解体していくという考え方である。

つまり、少々乱暴に言ってしまうえば、子どもとは自分の存在自体が不本意なのであって、それを「暴力」で周囲に投げ返していくことで大人になるということである。だから、非行は彼らの持つ根元的な対抗暴力性から見れば当然のことであり、成熟の契機でもあるという考え方である。



### 子どもは子どもではない

みごとに鮮やかな指摘で、そうかもしれないと私も思う。乳児がそこに存在するだけで、親は様々のことを突きつけられる。それがイノセンスの表明ということになる。私自身も幼児に触れていて、ずっと以前から、彼らの中に大人に対する密かな反逆精神を感じるものがあつた。たとえば、大人が困ることをわざと言う、大人の困惑や狼狽を楽しむ、あるいは、いきなりの攻撃を受けるなどの場面で、私はそれを感じていた。その時、子どもは子どもではないと感じていた。大人の考えている子ども概念をうち破って対抗してくるのだととらえていた。子どもは大人への対抗暴力だという指摘は、そこにぴったりと重なってしまふ。

ただしこれは単純な敵対関係ではなく、この対抗暴力を大人が肯定的に受け止めて

いくことによつてのみ、子どもは成熟できると岸沢氏は考える。逆にこれを十分に受け止めないで、子どもに否定的抑圧的に対抗すると、大人は権力的存在になつていく。そこにはいくつかのバリエーションがあるが、それをイノセンスの収奪と言つてゐる。

### 親の自己規定

問題は、このように規定することによつて、大人の側にどのような視座が獲得されるのか、それによつて子どもとの関係がどのように変わつていくのかということである。

おそらく大部分の親は自分自身の根元的暴力性を自覚はしてないだろう。むしろ、子どものために自分をも投げ出す善意の存在として自覚しているだろう。そういうところに、子どもとは親に対する対抗暴力だと言われても、親はそう簡単に受け入れられないとも考えられる。

しかし一方で、子どもの反逆的な行動を前にしてた

じろぐ親の非力さを思い起こせば、この指摘はそう突飛なものとは思えない。親子関係が権力関係だという指摘は、大昔からあつた。エディプスコンプレックスもそうだし、心理臨床の中で精神的な「親殺し」が子どもの自立のための主要なテーマになつてゐることももうなすける。アダルトチルドレン問題もそうだ。

もしかしたら、率直に親は子どもに対して権力なのだという認め方をしなくなつてきたことが問題なのではないか。子どもを子どもという枠の中に押し込め、過大な役割を課し、それに対し「子どものため」という狡猾な正当化を行い、しかもそれに気づかない根深い自己欺瞞性こそ、問題なのではないか。自らの暴力性を認めず、子どもがまっとうな対抗暴力を行使することを認めないところに、悲劇があるのではないか。

### 家族の矮小化と親役割の肥大化

子どもが第一義的に「被教育的存在」と化したのは、近代の所産ともいえる。一つの家に生まれ、運命

共同体の一員として、ともに生きていくはずの存在であつたはずの子どもたちが、共に生きる存在である前に「親によって教育される存在」になつてしまつた。あるいは、親個人の教育力を証明する存在になつてしまつた。地域が教育の場であることをやめて、個々の家族がそれを担うことを求められた。家族の主要な機能は「教育機能」とされ、親役割が異常に強調され、家族の成功は子どもでか如何にかかっているとでもいえるような家族機能の矮小化がそこにある。

### 権力の分断線

今や、子どもたちは生まれ落ちたその瞬間から、親の期待を一身に浴び、まさに「被贈与性」の固まりとして、家族の前に存在する。さらにその根元的「被贈与性」に加えて、自分が受け入れられることにもさらに条件を付けられ、芹沢氏の言う「権力の分断線」を設定される。これは親がその子を受容するときに、子どもに条件を付けることをいう。その条件の範囲内な

ら受け入れ、外側の場合は受け入れないという一方的に親の側から引かれた境界線のことである。それはいつてみれば、後天的な「被贈与性」とでもいえるものである。そして現代の発達環境の破壊もそこに含めて考えることもできる。

子どもはその境界線を敏感に感じ取つて、親に受け入れられるために、その内側に入ろうとし、自分自身とその条件を課す。幼児の自然なありようを無視した、とてつもない親の期待が一方的にかけられるのである。それに応えようとけなげにがんばる子どもたちが、根元的怒りを他者に振り向けるのも無理はないと思えてくる。

### 「子どもらしくない」子ども

そんなことを考えずにいられない一人の男の子N男を紹介する。彼は五歳児で、保育者によって「子どもらしくない」ととらえられた。保育者によって書かれた記録と考察の中から、抜粋させていただく。<sup>(2)</sup>

\*誕生会の世話係のグループを決めることになった。N男はどこにも入れず、もう一人残ったY男と一緒に話が出た。そうこうしているうちにY男が、N男の頬にキスをする。N男は「つばをかけられた」と大泣きを始める。落ち着くのを待ってN男の話を聞くと「Y君がつばをかけたんだ、僕はね、今までずーつと我慢してきたんだ、なんべん言ってもY君はね、つばをかけたたりたこうとしたりするんだ」保育者「そうか、N君は今までずーつと我慢してきたんだ」「前もね、D君や他の五人からもたたかれたりしてきたけど、それでも我慢してきたんだ」など、泣きながら話す。(四月。実はこのD君云々は二年も前のことであった)

\*N男、片づけの時、「裏の方にたくさん自転車が転がっていたので、ぼくが片づけてきた」と言う。保育者「そうかい、たくさん出しっぱなしにしてあった

んでそれを片づけてくれたんだね、ありがとう」と言う。あと、四歳児のクラスが弁当を食べているところに行つて、「なあー、君たち、お兄さんがいるからいいけど、僕たちがいなくなったら、君たちがやらなくちゃいけない。お兄さん達は小学校に行くんだからなあ、今はまだいいけどな、わかったか」と言う。

\*N男は、ゴールキーパーに自信を持っている。「僕はね、いつもキャプテン翼を見てるんだ。だからサッカーが上手なんだ。教生先生のボールも一回しか入れられたことがない。あとのボールは全部止めたんだよ。先生のボールも全部止めたよね」。(五月)

\*かたづけの時間に入ったのに、まだ遊びを切り上げきれないでいる実習生の所に行き、「やめる！片づけろ！」とほうきを振り回してどなりながら言い続け、止めさせようとする。

保育者が「教生先生も痛いし、それにどんなにがん

ばって叩いたり蹴ったりしても勝てないと思うよ」と言うのと、N男はよく「そんなことはないよ、だってね、僕はお父さんに何回も勝っているんだよ、いつもお父さんと戦いごっこして僕が勝つんだ」と話し、力を込めた拳を見せた。

\*水着を持っていなくてプールに入れなかったときに保育者が家も近いので「おかあさんに持ってきてもらえば?」と提案すると「おかあさんはね、すぐに忘れるんだ」「おかあさんがすぐ忘れるからダメなんだ」と繰り返す。(七月)

一学期の特徴として、\*友達の良い行為に対し我慢強く対応するが、我慢しきれなくなると激しい感情表現を



する。\*大人びたものの言い方をする。思いのままに行動することが少ない。心にプレークをかけながら行動する。我慢することが多い。\*大人(特に実習生)に対して攻撃的な行動をとることがある。\*年少児、年中児に対して自分は年上であり、何でもわかつていなのだという態度をとる、と保育者は指摘している。

N男の考え方には枠があり、周囲の子どもや大人がそのパターンにおさまっていないときは歯を食いしばったりしてひどく苛立つ。「やめろ!○○するんじゃない!」「○○するときはじやろうが!」とひどく言う。実習生に対してはくっつくかかかることが多かった。担任に対しては、「○○したらいいよね」「こをもっとこうすればうまくできるよね」などと思見

(?)を言うことが多かった。「僕が○○できるのはね、よくうちで練習してるんだよ。修行してるんだよ」と言う。

よく我慢をする。「俺は○○ができるん

だぞ」と自分がいかにすごいのかを話す。なんでも自分が一番だという気持ち強い。友達と競うことに異常に反応する。「先生、かけっこでは子どもの頃何番だった？僕は風組の時一番だった」と順位が気になる。そしてそれが認められると安定する。

ロボットになる

二学期になると、ロボットになることが多く見られ、一方でサッカーでS男に負けないことが、生活全体に影響を及ぼしていた。

\*午前中、牛乳パックを腕と足にはめ、段ボールで作った盾をもち、ペットボトルを逆さにもって、棍棒にし、「戦い」と言ってそこいらじゅうをねり歩いている。保育者「だれと遊んでいるの？」「いや、別に」「戦いごっこの相手はいないの？」「いや、戦いごっこじゃないんだ」「なるほど、じゃ、そうやってN君の姿をみんなに見せているの？」「そうでもないんだだけ

ど」とはいうものの、F男を相手に戦いを挑んでいる。F男は全く戦う気がない。

\*「僕、ロボットになる」と言っつて、牛乳パックとティッシュの箱を足にはく。ヘルメットをかぶると言い、廃材の箱をもってきて一生懸命に作り始める。

\*最近私（保育者）をよくくすぐる。「先生の弱点だ」と言っつて脇の下をくすぐる。「先生には弱点はないのだ」と言っつても何度もくすぐろうとする。私もN男のからだをくすぐり返すが、平気な顔をしている。

（九月）

S男をライバル視し、どうしても勝てないと感じ、不安定な日が続いた。こういうN男に対し、保育者は、様々な働きかけを行い、N男を理解しようとする。一年の間の成長の姿を認めることができた。N男の「子どもらしくない」言動の裏には、「自分のしたいことを満足するまでしたい、友達と仲良く遊びたい」という強い気持ちがあったように思えてならない。そ

の気持ちを隠すように目立った言動をしていたのではないかと思う」。このこと自体がN男の「子どもらしい」表現だったということに気づいたと保育者はまとめておられた。

N男は周囲の子にとっても強い態度で望んでいたし、自分は能力があると本人も信じていたようだったが、その実とても不安定で、絶えずそれを自分と他者との関係で確認していなくてはならなかった。そのためには、少しでも自分の価値を下げてはならないと緊張し、率直な感情を表に出せず、ときには異常なまでに攻撃的であった。彼が不安定なときは、「ロボット」になるというのも、象徴的だ。強くて誰にも負けないけれど、外からは表情が見えない、自分の本心はその中に隠れてしまう。他者に心を開くこと自体に警戒心を抱いているのだろうか。

次に感じるのは、大人全体に対する対抗心である。なんだか「対抗暴力」の固まりみたいな感じさえずる。父親に対しても異常なほどの対抗心を抱いている

し、母親にも信頼感を抱いていない。そして、担任の先生にも「弱点」を見つけ、攻撃する。決して笑わない。そして実習生には、くっつかかる。親や大人は、彼にとっては自分を支え受け止めてくれる存在ではなく、自分の強さを証明するための存在でしかなかったようだ。勝たねばという思いにひきずられ、強い自分でなければ存在する価値がないと信じている。親の引く分断線がどんなに子どもを追いつめるか、その残酷さが見えるような気がする。

(山口大学)

(1) 芹沢俊介『子どもたちはなぜ暴力に走るか』岩波書店、一

九九八年

(2) 野村泰「大人のような言動が多いと思ったN男(五歳児)

山口大学教育学部附属幼稚園研究紀要第二〇巻、一九九

四年